



師匠は初めて見る毛鉤（マドラミ）だった。手に、「鹿毛でこんなものが作れるなんてすごいな」と褒めてくれた。なんだか照れくさかったなあ。それからはシカが獲れるたびにお邪魔をして、僕の仕事前のこと、毛鉤を使った釣りのこと、色々とお話ししながら、気がつくとい時間くらい平気で話し込んでいた。

偶然、師匠がシカを解体しているときに妻と一緒に邪魔したことがあった。もう妻はギャーギャー言いながら、シカが見えない場所へと逃げる。師匠と僕は面白がって、鹿のキン○マを放り投げてみたりした。「これがありや、今晚からは旦那いらんな」。もう二人して悪ガキ状態だ。

逃げ回る地元出身の妻を尻目に、東京育ちの若造がシカの解体作業を興味津々で見ている。さばきやすいように脚を固定したり、内臓を出すを手伝ったりと、解体作業を手伝った。今思えばこの時、師匠に、もしかしたらこの男は……と思われたのかもしれない。



師匠と一緒に解体したシカ皮を僕がなめし、敷物としてプレゼントした時の記念写真

初めてシカを解体する

ニホンジカの毛は、フライフィッシャーとしての僕にとっても新しい発見だった。そもそもニホンジカというのは総称で、エゾジカ（北海道産）やホンシユウシカ（本州産）、キユウシユウシカ（九州産）などと、亜種ごとに分かれているということを知った。

キユウシユウシカはディアヘアのイメージとは大きく異なり、ウイングに使うと水面に優しく浮くのが特徴的だった。まるでCDCとでもいうか、これまで使ってきたディア系のマテリアルとは、大きな違いがあるヘアだった。

猟期も終わり、雨天が続いた梅雨時のこと。朝師匠から電話が入り、シカが獲れたから一緒に解体しないか？と誘われた。仕事がたまっていたが後回しに決まってる！（原稿遅れてすみません）僕はすぐに行きますと言って家を出た。

牛舎の一角にある倉庫からシカを解体場へと運び、師匠と一緒に解体を始めた。ナイフを立てると皮が切れやすい、脚を外すときは関節にナイフを入れる。細かいことを教わりながら、作業を進めていった。皮を剥いで内臓を出した後、師匠が脚を一本僕に渡した。

「まあ、やってみなさい。」
モモ肉の精肉作業だ。師匠のやり方を真似しながらナイフを進めていくが、どうしても僕がやると細切れ肉になってしまう。筋に沿ってナイフを入れているつもりなのだが、どうもうまくいかない。

必死になつて格闘を終えると、師匠が笑いながら「最初はそんなもんだ」と言った。しかも

僕が苦戦している間に、師匠は他の3本の脚の精肉を終えていた。僕が作業したものと並べてみると……。牛舎に笑い声が響いた。

狩猟免許をとろう

作業中、師匠から色々な話を教わった。狩猟をはじめたきっかけや周辺の狩猟事情、獣道のことや罠のこと。これまでの解体作業のこともあっただろうし、身を乗り出して話を聞いていたというもあるだろう。少しの沈黙の後、師匠がふと言った。

「狩猟免許とって一緒に猟に出よう。」

それまで狩猟なんて非現実の世界だったのに、師匠の一言で現実の世界へと変わった瞬間だった。自分が狩猟免許を取得するとは考えたこともなかった。しかし自然に囲まれた宮崎県の高原町なら、狩猟は珍しいことではない。日常の一部といっても過言ではないのだ。

自分で獲ったシカを自分でなめし、そのシカの毛で巻いた鉤で魚を釣る。これこそフライフィッシングの原点じゃないか？そう思ったら、自分こそ狩猟免許を取得すべきだと思えてきた。

その後しばらくの間、師匠からはシカが獲れたとの連絡が来なかった。シカが移動してしまいい、罠に掛からなくなったのかな？と思っていた。罠の狩猟免許受験の手続き方法を調べると、なんと申請締め切りまで5日しかない。あわてて書類を揃え、締め切り3日前になんとか間に合った。こりゃ師匠に報告しなきゃ。そう思っていたら、妻の母から知らせが入った。「大形さん入院してたんだって。」